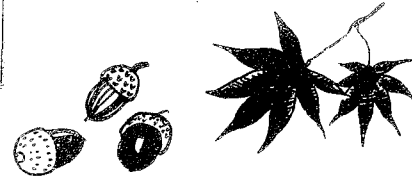


## 師走のいろいろ



今年は異例ともいえる夏季の猛暑に多くの国民が悩まされ、更に想定外の豪雨による自然災害にも遭遇し、日本全土が大混乱に陥った時期があった。でも季節の変遷によってその後は比較的落ち着いた状況となり、良い年の瀬を迎えることができたことを喜びたい。

近頃は一日の寒暖の差が大きく朝夕は寒冷を強く感じる季節となり、報道機関は細長い日本列島の北から南への秋季特有の大自然美を紹介している。休日には観光旅行に出かける人も多く、黄色に染まる銀杏の美しさは格別、また紅葉の代表であるもみじ（紅葉）やかえで（楓）の自然美を愛でる国民は多く今も昔も変わらない。また桜の葉が紅葉することを“桜もみじ”と呼び、落ち葉にも独特な趣があるようで、花見の名所は秋にも楽しめることを知った。

回遊式大庭園の栗林公園は紫雲山を背景に七つの池と十三の築山が見事に配置されている名庭園である。今年も秋のライトアップが始まり広い庭園のもみじや楓を美しく照らし出し、コイヘルペスのため不在となっていた池にも沢山の色鮮やかなニシキゴイが元気に戻り、昼間とは違った幻想的な雰囲気を出している夜景を初めて堪能できて嬉しい思い出になった。

暦の上での師走は陰暦十二月の異称であり太陽暦の十二月でもある。また年末には人々が忙しく走り回るので（しわす）とも呼ばれるようで、更に年末には様々な仕事があるという多忙に追われるものである。

古くから庶民の行事として言い伝えられている事柄として気象学的に重要な「冬至」がある。これは中国の24節季の一つで、地球上では太陽が一番南に偏った位置にあって、北半球では昼が最も短く、夜が一番長くなる。この冬至が過ぎると昼間が徐々に長くなり、寒さは残るも日差しが次第に強くなる楽しみがある。更に冬至には「冬至風呂」と言われる行事があり、風呂に柚子の実を入れて入浴すると一年中病気にならないと言われるもので古くから実行されている。

十二月は気象条件の変わりやすい季節である。天気図では「西高東低」の気圧配置がよく見られ、等圧線が南北の方向に走って縦縞模様になり、冬の天気図の代表的なもので古くから天気予報によく現れ、馴染み深い気象言葉である。一方この天気図を見ると冬の寒さを感じるものであるが、十二月でも寒い日ばかりでなく時には温かく感じる日もある。一週間位の間隔で寒暖の日が訪れ真冬への気配を濃くする時季であり、これを「三寒四温」と呼んでいる。

師走の恒例行事として行われる最も普遍的なものは忘年会である。一年間の慰労といった意味のもので、お酒の好きな人では何日も前から楽しみに心ゆくまで嗜む人もいる。また普段は会う機会がなく年に一度の懐かしい昔に帰る人も少なくないと思われる。酒の飲み方にも色々あって、酒癖の悪いのも困るが陽気に騒いで飲む酒はストレス解消に役立つ。また楽しみとしては静かに飲みたいし、健康のためには肉類、魚、チーズなどのたんぱく質のご馳走と一緒に食べる心がけが必要であるという。

“クリスマス”も古くからの年末行事の一つで、屋外や公共の建物では見事なクリスマスツリーが見られる。また、以前には田舎の家庭でもよく見られたが近頃はめっきり少なくなったのは時代の流れによるものと思う。確かに近代建築ではサンタクロースの入る煙突がないのは面白い。

ところで話は変わりますが、一般にあまり知られてない12月1日が記念日となっている事柄について資料を引用して述べてみたい。（その1）は大島高任が我が国で初めて釜石溶鉱炉に火を点じ、近代製鉄の基礎を作ったのが安政4年（1857）の12月1日であった。後にこの日を記念して昭和33年の12月1日に「鉄の記念日」を定めた。この鉄鋼材の開発は社会の発展に大いに貢献している重要な企業で、現在も日本鉄鋼連による記念行事があるとか。

（その2）も古い話であるが、日本での映画興行の始まりは明治30年のことで、その後映画は全国に発展し庶民の娯楽の先端を走り、戦時中には戦況の報道を支えた。昭和30年には映画興行60周年を記念し12月1日を「映画の日」と定めた。しかしその後はテレビやカメラが急速に普及して娯楽の主流となり、映画界は衰退に転じて町の映画館は姿を消した。でも近年では映画独自の復活が進み、世界映画祭の価値も再認識されている。

年末のこの時期に良く聞かれる言葉は“はや一年が過ぎて、また一つ年を取ることになった”との嬉しいような悲しいような言葉である。この一年間の時間は皆さん同じのはずであるが、自分の持つ感覚時間は人によって短くも、また長くも感じるものであろうか。一例として“待つ時間”は長く感じるようでトラブルの原因になり易い。一方で「待てば海路の日和あり」の諺があり、気長く生きる心がけが人生では大切と思われる。お互いに良い師走を迎えたい。

